



梅雨とアジアモンスーン

村松照男

気象衛星センター所長

梅雨も地球をめぐる大気の流れと、ユーラシア大陸、太平洋、インド洋が演じる東アジアの雨季である。さわやかな初夏と熱帯並みの真夏を分ける梅雨は、風と雨が主役の大規模な循環システムであるアジアモンスーンの一部である。

赤道上空約三万六〇〇〇キロメートルにある気象衛星「ひまわり」から地球を眺めると、バレーボール大の青い地球が漆黒の宇宙を背景に浮かび上がる。両極のホワイトキャップとの間に青い大洋が広がり、その東の端には日付変更線の向こうにハワイ諸島が点在し、西にはチベット高原の南縁に白い峰々を抱くヒマラヤ山脈が弓状に横たわっているのが見える。その南東のインドシナ半島から日本列島の上部を通り千島列島の南に伸びる、延々数千キロメートルにも及ぶ白い帯が、広大な太平洋の北西部を縁取るように白く輝いて見える。梅雨前線の雲の帯である。中国ではメイユと呼ばれ、朝鮮半島ではチャンマと呼ばれている梅雨は、

最も早い南西諸島における五月中旬から次第に北上し、西日本では六月上旬の入りとなる。そして、北上する前線は東北地方で突然大陸にジャンプして消えてしまうので、北海道には梅雨がない。

梅雨のメカニズムはこうである。夏の北半球が暖められ、冬の南半球から南東の風が赤道を越えて吹き込み、インド洋やベンガル湾から湿った気流が北上するとともにアジアモンスーンがユーラシア大陸に吹き込む。そびえ立つヒマラヤ山脈と、高度四〇〇〇〜五〇〇〇メートルに及ぶ日本の数倍の面積をもつチベット高原が天に突き出し、太陽の熱によって暖められて巨大なヒーターとなり、モンスーンを吸引する巨大ポンプの役割となる。吸い込まれた大量の湿った空気が豪雨をもたらすと同時に、吸い込まれたモンスーンが地球の自転により東に曲げられてインドシナ半島から日本に向かう南西気流が作られ、日本の梅雨前線につながるのである。

天気図を見ると、夏の太平洋高気圧と北の冷涼なオホーツク気団の間に梅雨前線が停滞し、前線の上空にはヒマラヤ山脈の北側をまわるジェット気流が流れている。別のジェット気流は、巨大ポンプのチベット高原の北側で大きく蛇行を強いられ、その結果としてオホーツク海付近では流れに取り残されて分離したブロッキング高気圧という長寿命で停滞性の上空の高気圧ができて、ガツプリ四つに組んで動かなくなる。

冷たいオホーツク海高気圧が長く停滞して冷風扇の役割を果たし、北東の冷たい風「やませ」を日本列島の東日本、北日本に吹きつけ、北側のオホーツク海高気圧が強くて前線が南下すれば「梅雨寒」、北海道では「リラ冷え」となり、本州の中部山岳より東でシトシト型の雨をもたらす。対照的に西日本では太平洋高気圧からの送風ポンプで「湿舌」と呼ばれている熱帯並みに湿った南西流の流れ込みでザーザー型の豪雨となる。空梅雨とも

なれば「列島水不足」となり、集中豪雨ともなれば、一九八二年七月二三日夜の長崎豪雨のように一時間雨量一八七ミリの大被害を引き起こす。梅雨は、恵みの雨と豪雨との両刃の剣である。



るが、日本の梅雨入りの時期は、インドモンスーンの開始と密接に関係しており、モンスーンの入りで終わるチヨモランマ登山のタイミング好機にもつながっている。冬のジェット気流がヒマラヤからはるか北上する四月末から、モンスーンが

ベンガル湾からネパールに到達する五月末までがブレモンスーンと呼ばれる。登頂の成否は、このわずかな期間に好機が恵まれるかどうかが鍵となる。

筆者の友人らのパーティーが昨年の五月、チヨモランマの北東稜から頂上に挑んだ。筆者は、日本の数値予報の予想資料、衛星資料を自前で解析し、高度五〇〇〇呎のベースキャ

このように、インド洋やベンガル湾とユーラシア大陸のモンスーン関係に、太平洋とオホシツク海の盛夏と冷涼のコントラスト、それに上空のジェット気流が役者となり、ヒマラヤ、チベットが演出して梅雨が起こっている

ンプに一月間、インマルサット衛星経由の衛星電話で日々の気象コメントを日本から送り続けた。稜線付近のジェット気流が北上して風が弱まった時期で、周期的に通る気圧の谷を避けて「一時的な好天が二、三日続くか

どうか予報をもらえないと成功しない」という厳しい条件が求められていた。モンスーンの雲と雨域の北上の動きと下層の湿りの分布を、衛星写真を見ながら気圧の谷の通過を見極め、ゴーサインを出した後はハラハラのしどろしどろであった。ついに好機到来で五月十七日、二四日の二度の登頂成功となったが、登頂直後に猛吹雪で前進キャンプに逃げ込んだ、という情報が八〇〇〇呎のキャンプから日本の携帯電話にかかってくる。便利過ぎる世の中となってしまう。

もしヒマラヤ、チベットを削ってしまったら、と本気でシミュレーションした人がいたが、結果は梅雨がなくなり、日本を緑豊かにしている年間雨量約一八〇〇ミリは激減した。数百万年前に始まり現在も続いているヒマラヤ造山運動という悠久な時間と、太平洋、インド洋とユーラシア大陸、そして地球をめぐるジェット気流など、国境なき流れの中で生まれたのが梅雨なのである。もし削れば梅雨が消え、同時にヒマラヤ登山の楽しみもなくなり寂しいこととなる。

〈むらまつ てるお〉一九四五年、静岡県生まれ。気象大学校卒。理学博士。専門は台風、天気予報学。気象大学教授、札幌管区気象台技術部長、名古屋地方気象台長を経て、〇三年より現職。七〇年には南極観測越冬隊に参加。著書に『台風のエネルギ』、『大気とその運動』『気象と生活』（ともに共著）、『天気のみくみ』（監修）など。